

いは都の中に、水を通して悪霊が入って来ないようにというお祀りまつり事に使われるものだったからです。また雨乞あまごいなどにも使われるような物です。この土馬と一緒に出てきた土器などは10世紀のものだということが分かりました。したがって、ここにお城が出来る200年も前に、ここはすでに水溜りで池があって、そこで信仰が行われていたということが分かってきたのです。

ではその水の信仰はどういうものかという、おそらく雨乞いではなかったかと思えます。太田地方で言い伝えとして残っているのは、ちょっと前まで雨が降らなくなると赤城の大沼まで行って一升瓶に水をくんで来て、それで雨乞いをやるということがあったそうです。同様に、おそらく日ノ池の水をもらい受けて、村に持ち帰り雨乞いをやる。あるいは、この場がですね、そういった雨乞いの場になっていたというようなことも考えられるわけです。

金山城は、まさにこのような神聖な水のお祀りの場をその中心に取り込んで城を造ったということになります。日ノ池を囲むように、三ノ丸、二ノ丸、実城みじょう（本丸）が並び、南側には御台所曲輪みだいどころくわ、南曲輪が配されています。これらの曲輪が日ノ池を片仮名の「コ」の字のように囲んで城を築いています。その中でも一番高いところに実城（本丸）を築く構造を考えてお城を造ったことになるわけです。この城づくりの中に、この聖なる池・日ノ池をうまく利用しているということが分かってきています。

戦国の時代では、領内の雨乞いの儀式というのは、全部領主がやったそうです。領主の威徳がないと、その領内は雨が降らない。雨が降らないのは、領主の威徳がないからだというようなことになったわけです。そういったことを考えますと、これは新田岩松家純にったいいわまついえずみが築いた城ですが、この金山城の支配する領内は、いつも日ノ池が水を満々と湛えておりますので、いつも水が枯れることがない、必要な季節にはいつも雨が降っていた、それだけにこの領内は裕福であったというようなことになるのかなと思えます。

いわゆる「雨乞い」という民間信仰とそれに関する

神聖な儀式の場を城の中に取り込んでしまったことで、領主が自ら雨乞いを執り行うそういった儀式の場に日ノ池の格上げが行われたことになるわけです。

また、この城造りで、通路形態からもう一つのことことが分かってきました。大手虎口を抜けて、日ノ池のある曲輪に入ると、通路はこの日ノ池に沿ってぐるっと4分の3周回って御台所曲輪に入る形態になっています。つまり通路は、来訪者に日ノ池を見せつけるように巡らされていたのです。誰もがこの金山城の中に入ると、信じがたい所に、満々と水を湛えた月ノ池、日ノ池がある。それをいやがおうでも見なくちゃならない。それは同時に、領主の威徳を外から来るものに対して見せつける、あるいは味方の者に対して見せつける。そういう威徳の誇示にも使われていたのではないかと分かってきたわけです。

さらに、日ノ池は外に対してだけでなく、内に対しても重要な役目がありました。一族・家臣・同心衆などの心の結束や、誓いを固めるために重要な役割を果たしています。尾島町の長楽寺の僧が当時の岩松氏などの情勢を綴った『松陰私語しょういんしご』という記録があります。その中に「御神水の儀」という言葉が出てきます。「一味親水いちみしんすい」とも言うんですが、この聖なる水をお互いに飲んで、裏切らないという契りを行なう儀式です。同じく「盃をかわす」という言葉がありますけども、これがお酒ではなくって、水を飲んで味方の結束をより一層強めていったことになるわけです。新たに同族・縁者になったり、家臣に加わったり、あるいは同盟を結んだりすると、誓約書のようなものを書かせるんですが、誓約書は所詮紙切れですので、そのくらいでは戦国の世ではしょっちゅう裏切りがあったわけです。そこで、それだけでは飽き足らずに、こういった同じ聖なる水を飲み交わして、天上界、下界の神々それから八幡大菩薩に向かって誓いを立てるという「一味親水」の儀式が行なわれたわけです。

金山城跡でもこの儀式を行なったことが『松陰私語』に書かれています。これに出席しなかった、